

近眼芸妓と迷宮事件

夢野久作

青空文庫

俺の刑事生活中の面白い体験を話せて云うのか。小説の材料たねにするから……ふうん。折角せつかくだが面白い話なんか無いよ。ヒネクレた事件のアトをコツコツと探りまわるんだから碌ろくな事はないんだ。何でも職務しごととなるとねえ。下らないイヤな思い出ばっかだよ。

その下らないイヤな思い出が結構。在ありきたり来の名探偵大成功式の話じゃシンミリしない。恐ろしく執念深いんだなあ。

それじゃコンナのはどうだい。どうしても目星が附かないので警視庁のパリパリ連中が、みんな兜かぶとを脱いだ絶対の迷宮事件が一つ在るんだ。所謂いわゆる、完全犯罪だね。そいつが事件後丸一年目に

或る芸妓げいしやのヒドイ近眼のお蔭で的確に足が付いた。すぐに犯人が捕まったつてえ話はどうだい。珍らしいかね。実はこれは吾々にとつちや実に詰まらん失敗談だがね。探偵談なんていうのも恥かしいくらいトンチンカンな、単簡明瞭な事件なんだが……。

なお面白い……ずるいなあ、とうとう話させられるか。

もう古い話だ。明治四十一年てんだから日露戦争が済んだアトだ。幸徳秋水の大逆事件の前だっけね。チツト古過ぎるかね。……構わんか……。

ずいぶん古い話だがこの事件ばかりは、どうしても忘れられない変テコな印象がハッキリ残っているんだよ。何故だかわからないが、メチャメチャになった被害者の顔とか、加害者の若い青

白い笑い顔とか、その間に挟まった芸妓のオドオドした近眼とかいうものが、不思議なほどハッキリと眼に残っている。

話の筋道は頗る簡単だがね。ほかの事件と違って何だか、こう考えさせられる深刻な、シンミリしたところがあるように思うんだ。

事の起りは在り来りの殺人事件だった。

飯田町の或る材木屋の主人で、苗字は忘れたが金兵衛という男が、自分の家の材木置場で殺られたんだ。天神様の御縁日の翌日だったから二十六日だろう。天気の良い朝だったつけが、行つてみると非道い殺され方だね。

五十恰好の禿頭のデツプリした親爺で、縞の羽織に前垂、

雪駄せつたという、お定きまりの町家まちやの旦那風だんなかぜだったが、帽子を冠かぶらないで懐ふところ手てをしたまま、自分の家うちの材木置場まき置きばから、飯田橋の停車場ていじやばの方かたへ抜けて行く途中ちゆうちゆうの、鋸屑のこがくずのフワフワ積たった小径せうけいの上に、コロリと俯伏うつぶせに倒れている……材木の蔭かげから躍はり出た兇漢けいげんに、アツという間もなく脳天のうてんを喰くらわされたんだね。額ひたいから眼鼻がんびの間へかけて一直線いちじくせんに石榴ざくろみたいにブチ割わられて、脳味噌のうみそがハミ出でている。ちよつと見たところ、出血しゅつけつの量が非常に少ないと思おもったが、顔かほの下の湿しった鋸屑のこがくずを掘ほってみると、下したの方かたほど真黒まぐろくドロドロになつてゐる。死後推定時間しごうすいじやうじかんは十時間じゅうじかんだつたと思おもうが、倒たれたまま、動うかなかつたらしい。文句ぶんこうなしの即死じやくしだね。ところでここまで判明はんめいしたが、その他の事ことが全くわからない。

その頃まではどこの材木置場にも木挽こびきが活躍していたので、現場の周囲が随分遠くまで新らしい鋸屑だらけだ。犯人もそこを狙って仕事をしたものらしく足跡が全くわからないのには弱ったよ。いくらでも足跡が在るには在るんだが、ハツキリしたのは一つもない。屍体したいの近くに二個所ばかり強く踏み躪にじつてあるのが兇行当時の犯人の足跡ものらしかったが、単に下駄じゃないという事がわかるだけで推定材料にはテンデならない。被害者の懐中物は無尽むじんこ講うの帳面が二冊キリ。墓がまぐち口も煙草容いれもない。……という極めてサツパリした現場なんだ。

その時の現場に出張していた連中はかなり大勢だった。少々大袈裟だったかも知れないが、仕事が閑散だったせいだろう。最初

に麴^{こうじまち}町署から来た四五人のほかに警視庁の第一捜査係長、刑事部長、警部補、巡査、刑事が四人、鑑識課の二三人、警察医が二名、予審判事と書記というのだから、殆んど全国の警察でも一粒選^{より}の鋭い眼玉が、そこいら中を一生懸命に探しまわったもんだが、何一つ手がかりが見当らない。ただその後の屍体解剖で、額にブチ込んだ兇器が厚さ一分位、推定一尺長さ以上の一直線の重たい物体であつた。ちょうど鉈^{なた}の背中みたようなものだつた。：

：という事が判明しただけだったが、しかもこの鉈の背中という説明のし方が、アトから考えるとドウモ面白くなかつたね。やはりこの事件を迷宮に逐^おい込んだ原因になつていふと思ふんだ。長さ一尺以上、厚さ一分位の、一直線の重たい品物というので、み

んな寄つて色々考えてみたが、前に鉦の背中という言葉聞いてたもんだから、それ以外の品物をドウしても考え付かない。まさかソナ大きな文鎮ぶんちんが在ろうとは思わないからねえ。一直線の重たい、手頃の金属板……文鎮……製図屋と直ぐに思い付く程、頭のいい奴は実際にはナカナカ居ないものなんだ。探偵小説にはザラに居るかも知れないがね。そこで直接の証拠物件が見当らないとなると今度は情況の証拠という段取りになるだろう。

金兵衛の女房、店の番頭、若い者なぞを、手を分けて調べてみると、金兵衛は昨日きのうの夕方、夕飯を喰つてから、本郷の無尽講の計算に行つて来ると云つて、預つていた旧式の帳面と、九百円ばかりの金を店の金庫から取出して、イクラはいか這入はいった墓口と一緒に

に懐ふところ中に入れた。落さないように懐ふところ手をしながら、帽子も何も冠かぶらないままブラリと表口から出て行ったのを、女房と番頭が見ておった。それつきり昨夜ゆうべは帰つて来なかつたが、毎月二十五日の無尽講の計算の日には、そのままどこかへ行つてしまつて、帰つて来ないのが通例になつていたから、みんな早く寝てしまつた。

あくる朝……つまりその二十六日の朝になつて、番頭と若い衆しゆが、その日うちの中に深川の製材所から河岸かしに着く筈になつている櫓もみ板の置場を見に行くと、直ぐに屍体を発見して大騒ぎになつた。殺されるような心当りは一つもない……という至極アツサリした話……。

むろんそれから家内中の者を綿密に調べてみたが、怪しい者なんか一人も居ない。女房は締め屋の堅造かたぞうで、一高の優等生になつてゐる柔順おとなしい一人息子の長男と一緒に、裏二階で十時頃まで小説を読んでいたが、怪しい物音や叫び声なんか一度も聞かなかつた。又若い番頭は、店の表二階で焼芋を買つて、十時過まで猥談をやつていたので、尚更、何も聞かんといい訳でね。みんな今でいう現場不在証明アリアバイをチャンと持っている。金兵衛は相当ケチケチした親方らしいが、それでも人使いが上手うまかつたのだろう。怨んでゐる人間なんか一人も居ないらしいのだ。

コイツは又迷宮入りかな……といった感じが、そんな取調とりしらべの最中にピンと頭へ来たがね。

しかし何しろ九百何円の金がなくなっている以上、殺人強盗という見込みなんだから事が重大だ。しかも、よつぽど前から金兵衛の日常の癖や何かを研究して知っている人間で、相当の腕力と元氣のある奴だ。殊に日が暮れているとはいえ人家や、電車道に近い薄明るい処で、これだけの思い切った仕事を遣^やつ付けている以上、生やさしい度胸ではない。事によると前科者かも知れない……という理窟から遠い親戚や無尽講の関係者、又は九段下界限の前科者や無頼漢^{ごろうつき}なぞを出来るだけ念入りに洗つてみたが、これとても疑わしい奴は一人も居ない。その中でも、二十五日の晩に、湯島天神の境内に集まっていた無尽講の世話人連中は、肝腎の帳面と金を持っている金兵衛が来ないので、その晩の九時頃になつ

て、飯田町の金兵衛の家に電話をかけた。うちすると女房の声で、もう着く頃だという返事だったので、夜中過ぎる頃迄酒を飲みながら待っていたが、それでも来ない。そこでモウ一度電話をかけてみたが、今度は誰も起きて来ないらしいので、殺されているとは夢にも知らずに、明日、あした金兵衛の処に押しかけて行く事にきめて皆ブツブツ云い云い帰って寝た。大方金兵衛は九百円の金を、ほかの事に廻わしたので、金策に奔走したままどこかへ引つかかっているんじゃないかと云う者も居たが、イヤ、金兵衛さんはお金の事ばかりはトテモ几帳面だから帳面を預けたんだ。そんな事をする気づかいは絶対はない。どうもおかしい……と云う者も居た。すると又……イヤ、金兵衛はこの頃、築地のどこかに妾を置めかけい

ているという話だから何とも知れない、なぞ云う者が出て来てワイワイ云い合いながら別れた……という腹藏のない連中の話なんだ。

ここで金兵衛の妾の話が出たので、直ぐに飛び付くように金兵衛の素行調べに移った訳だが、その妾というのは検番を調べてまわると直ぐに判然わかつた。芳町よしちょうの芸妓げいしやで取つて二十五になる愛吉というのが……本名はたしか友口愛子といったつけが、去年……明治四十年の暮に金兵衛から引かされて、築地三丁目の横町で、耳の遠い養母おふくろと一緒に小さな煙草屋を遣つている。二階が押入、床の間附の六畳で、下が店の三畳に、便所に台所という猫の額ぞうさくみたいな造作ぞうさくでね。引かされたといつても自前になつただ

けで、お座敷はやつぱり勤めさせられていた。稼ぎ高は時々金兵衛が来てキッチンキッチンと計算する。台所のコマゴマした買物帳までも調べるという。ナカナカ抜目のないガツチリした親爺だったのだね。

ところが又その愛吉の愛子という女がイクラか馬鹿に近い位、溫柔おとなしい女なので、或る待合の女将おかみが不憫がつて、結局その方が行末のためだろうというので、金兵衛に世話したという話だったが、非道ひどい奴で、金兵衛は愛子の人の好いの付込んで、稼ぎ高を丸々取上る上に、お客まで取らせていたというんだから呆れたね。算盤そろばんの強い奴には敵かなわないね。

それから今度は搜索の手が、愛子の素姓調べに移った訳だが、

そんな細かいところは面白くもないし、本筋に関係がないから又
キにしよう。とにかく愛子は某富豪華族の御落胤で、お定さだまりの
里子上りの養母ははおやに、煮て喰われようと焼いて喰われようと文句の
云えない可哀相な身上であつた事。三味線も踊りも、歌も駄目で、
芸妓としては溫柔おとなし過ぎる事、縹きりよう緞は十人並のポツチャリした
方で、二十五だというのにお酌みたいに初々しい内気な女であつ
た。それにチョットわからないが、非道ひどい近眼だつたこと……こ
れが一番大事な話のヤマなんだが、その近眼で人の顔をジイツと
見る眼付が又、何ともいえず人なつつこい。見られた人間は、ち
よつと惚れられているような感じを受ける事……アハハ。馬鹿に
しちやいけねえ。俺うぬぼが自惚れた訳じゃねえんだ。誰にもそう思わ

れたんだよ。

それよりも事件発生以来、毎日毎日警視庁の無能を新聞に敲たたか
れながら、ジイツと辛棒して、こうした余計な事をジリジリと調
べてまわる俺達の苦労が並大抵じゃなかった事だけは同情してお
いてもらいたいね。新聞記者なんてものは、そんなところにはミ
ジンも同情しないからね。読者を喜ばせるのが商売だから、むし
ろ「警視庁の無能曝露」とか「犯人の大成功」とか書きたい気持
で、まだですかまだですかと様子を聞きに来るんだからウンザリ
しちまわあ。イヤな商売だよ。全く……。

ところが又、生あいにく憎な事にこの事件が、だんだんと新聞の註文
に嵌はまりそうになって来た。この筋を辿って行けばキット何か

ブツカルに違いないという、俺一流のカンが当たっていたかいなかつたか、愛子には今まで一人の情夫らしいものも居ない。念のため今までのお客の中で、好いたらしい事を云い合つた者は居ないか。チョツト惚れぼでもいいから居ないかと聞いてみたが、愛子はただポカンとして頭を左右に振るばかりだから、しまいにはこつちが負けてしまった。頭の悪い奴はコンナ場合全く苦手だよ。殊に女にはコンナ種類の返事をする者が多いから困るんだ。

実は愛子が惚れた男がチャント居たんだ。愛子はその男に、生れて始めての恋を感じているにはいたんだが、タツタ一晩、会つたキリだし、気の弱い女だもんだから自分でもチョツト惚れのつもりでほかの苦勞に紛れて、そのまんま忘れていたんだ。むろん

其奴が犯人だったのだが……まあ……急かすと聞き給え。ここが面白いところなんだ。

そんな訳で事件当時の愛子には、これぞという心当たりが全くなかったんだから手の付けようがない。そうかといって愛子の取ったお客を一々調べ上げて、足を洗ってみるとするのはトテモ大変な仕事だし、第一、それほどの確かな見込を付けていた訳じゃないんだから、そのままこの方面の搜索を打切る事にした。

そうなると自然、搜索の方針が八方塞がりになる訳だから、話が一番最初のところへ逆戻りして来る。つまり否が応でも兇器を発見して、その兇器から当りを付けて行かなければならない事になつて来たが、その肝腎要の兇器が、事件発生以来どうして

も見付からないのには弱らされたね。弱るも道理か……犯人はその兇器の文鎮をチャンと仕事場に持って帰って、ニツケルめつき鍍金を仕直して、毎日毎日製図の仕事に使っていたんだから、コレ位馬鹿馬鹿しい話はないんだが、こっちはソナ事とは夢にも知らない絶体絶命だ。頼みの綱はコレ一つ……兇器さえ見付かればこっちのもの……東京市中を持ちまわって、一軒一軒しらみつぶ風潰しに出所を調べてまわっても構わない覚悟で、飯田町一帯の材木置場の隅から隅まで鋸屑おがくずを掻きまわしたもんだ。

笑い事じゃないんだよ。一口に迷宮事件というけれども、迷宮事件の裏面にはコンナ苦勞がドレ位積み重なっているか知れないのだよ。しまいには九段下から大手あたりのお堀へかけての大搜

索まで遣ってもらったが、古バケツ、底抜け薬罐やかん、古下駄、破れ靴、犬猫や、傘からかさの骨以外には何一つ引つかかつて来ない。新聞にはその大搜索の状況を写真にまで出したが、吾々はただ、そうして笑われているような気がしたばかりだった。

とうとう事件発生後、三個月目に完全な迷宮入り、搜索打切の宣告を聞いた時の残念さ、無念さ……それは絶対にお役目氣質かたぎとか何とかいうもんじゃなかったよ。吾々仲間の根性とでもいおうか。事件の筋道が尻切しりぎりトンボになって、有耶無耶うやむやになった不愉快さといったらないね。家うちへ帰つても二三日は飯が不味まずくて嬢かかあを相手に癩かんしゃく癩しゃくばかり起していたもんだが……むろん初めの騒ぎが大きかっただけに、警視庁が新聞からメチャメチャに野次り倒

された事は云う迄もない。しかし事實は文字通りに「警視庁の無能」「犯人大成功」なんだからチューの音ねも出なかつた訳だよ。

ところが、こうした徹底的な迷宮事件……手がかりのなくなつた完全犯罪が、それから一年も経つた後に、思のちいがけない愛子の非道ひどい近視眼のお蔭で目星が付いたんだから皮肉だろう。

不思議……：：：そうだねえ。ちよつと聞くと、ずいぶん不思議な、神秘的な話に聞えるだろう。ところが事實は何でもない。何ともいえない人情に絡んだ憐れな話なんだ。

ちようどそれから丸一年経つた明治四十二年の、やはり四月の中頃の事だった。むろん次から次に起る事件に逐おわられて、金兵衛殺しなんか忘れている時分だったが……。

雨はシヨボシヨボ降るし、事件も何もなし……というので、仲間と一緒に警視庁の溜りで雑談をしていると、給仕が面会人を取次いで来た。

「築地の友口愛子……大至急お眼に掛りたい……」
と云つて小さな名刺を一枚渡した。

トタンにドキンとしたね。一年前の苦心をズラリと思い出しながら慌てて立上つたよ。コンナ場合に、コンナ調子でヒョッコリ面会を求めに来る事件の中の女は十中八九、何かしら重大な手がかりを持って来るものなんだ。

仲間に冷やかされながら例の面会室に来てみると、疑いもない愛子がチャント丸まるまげ鬚ゆに結つた野暮やぼつたい奥様風で、椅子に腰を

かけている。よほど心配な事があると見えて、顔色が真青に裏れ
ている。おまけに妙にオドオドした眼付でこつちを見る表情に、
昔のような人なつこい愛くるしさがアトカタもないようだ。

占めた……と思ひながら何喰わぬ顔で話を聞いてみると、愛子
は金兵衛に死別しにわかれてから、芸妓げいしやを廃業やめて、義理の母親おふくろと一
緒に煙草屋専門で遣つてみた。すると近所の会社員や、工場の職
人たちが盛んに買いに来てくれるので、結構やつて行ける事がわ
かった。しかし一方に養母おふくろが、芝居と、信心と、寝酒の道楽を
初めて、死んだ金兵衛の伝でグングン臍へそくり繰くをカスリ取る上に、
良い縁談をみんな断つてしまうので、愛子は朝から晩まで店の稼
ぎと所帯の苦勞に逐おわられて、この頃はスツカリ裏やつれてしまった：

…というような話で…：つまり愛子は生れてから死ぬまで絞り取られるように出来ていた女なんだね。…：それから愛子はオズオズと一通の手紙を出して、これを読んでくれと云うんだ。

俺は何かの脅迫状じゃないかと思つて半分失望しいしい、その手紙を開いてみたら大違いだった。便箋三枚に製図用の紫インキで綺麗に、細かく、ベタ一面に書いてあるんだ。参考品の中に保存してあるがね。見せてやろうか…：ウン…：こつちへ来てみたまえ。この手紙だ。

「前文御めん下さい。僕は貴女あなたに感謝しなければなりません。昨日偶然きのうに僕と、貴女とあすこで二人切きりになった事を、貴女は

記憶しておられるでしょう。あの時、貴女の横に腰をかけていたのは警視庁の思想犯係の刑事だったのです。そう気付いた時に僕はモウ絶体絶命の立場にいる事を知りました。貴女の前の御主人の事を根掘り、葉掘り聞いた僕の顔を貴女は記憶しておられる筈でしたから。

そればかりでなく僕は、貴女が苦勞に窶やつれておられる姿を見てシミジミと自分の罪を思い知りました。すぐにも名乗ろうかと思ひながら躡ちゆうちよ躡ちよしておりましたが、その時に貴女は以前の通りの愛情の籠った眼でジイツと僕を見られただけで、そのまんま知らん顔をしておられました。貴女が僕に、どうかして無事に逃げてくれと云っておられる無言の気持がよくわかりま

した。

ああ。あの時の気持。僕の感謝の気持を、どうしたら貴女にお伝え出来ましょう。

貴女の前の御主人金兵衛は悪魔だったのです。貴女のそうした涙ぐましい純潔な心ばかりでなく、貴女の清浄な肉体、血液までも絞りつくそうとしている悪魔だったのです。ですから僕は、あの悪魔を懲こらして貴女を救い出し、同時に僕の外国行ゆきの旅費を作ろうと決心してしまったのです。それから一ヶ月ばかりの間金兵衛を跟つけまわして、とうとう完全なチャンスを手に入れたのです。しかし外遊はしませんでした。金兵衛から奪ったお金は皆、党の運動資金に費つかってしまいました。

僕は貴女の思想から見ればドンナに咀^{のろ}われても足りない人間です。貴女の御主人の仇敵です。社会の公敵です。貴女の不運の原因を作った人間です。それを貴女は知らん顔をして見のがして下すつたのです。

ああ。貴女はあの、タツタ一夜の純情を、一年後の今日までも僕に対して注いで下すつたのです。僕を愛していて下すつたのです。

僕は生れて初めて貴女によって人間の純情の貴さを知ったのです。唯物主義一点張^{ばり}の血も涙もない生涯を送ろうと思つていた僕の信念が、貴女のお蔭で根柢からグラ付き初めたのです。

僕はキチガイになりそうです。

僕はモウ二度と貴女にお眼にかからない処へ逃げて行きます。裏切者にならないために、貴女の純真な、切ない愛情をタツタ一つ抱いて、満腔まんこうの感謝を捧げて死んで行きたいために。

僕は裏切者となって、貴女と結婚して、貴女をエタイのわからない不幸な運命に陥れるに忍びません。

どうぞ幸福に幸福に暮して下さい。

淋しい社会主義者より

友口愛子様

この手紙は直ぐに焼いて下さい。貴女の御親切に信頼します。

この手紙を読み終ると直ぐに、これは一刻も猶予ならんと思っ

て立上りかけた……が……又思い直して腰を落付けた。この手紙を持って来た愛子の態度が、あんまり不思議なので……自分に好いている男を一人死刑にするような遣り方なのに……正直者の愛子がソナ残酷な事をする筈はないと思つたので、念のために今一度訊問してみる氣になつた。社会主義者一流の計略じやないかしらんと、いう疑いも起つたからね。

「ふうむ。愛子さん……」

「ハイ……」

「あんたはこの手紙の主ぬしに心当りがあるのかね」

ビツクリしたように眼をパチパチさせた愛子は丸鬚を軽く左右に振つた。

「いいえ。ちつとも存じません。何を書いてあるのか読めないものですから。字があんまり細かくて……」

俺は唾然となつてしまった。

「ナアンド。まだ読んでいないのかい」

愛子は丸鬚に手を遣りながら淋しく笑つた。

「ハイ。コンナような手紙が、よく男の方から参りますので、そのたんびに母親おつかさんに読んでもらつておりますが、この手紙の文句ばかりは、わからないと母親おつかさんが云うもんですから……
処々拾ところどころい読みしてもらつてもチンプンカンプンですから……ただ金兵衛さんの名前が所々ところどころに書いてあつて、社会主義者が死ぬつてい
うような事が書いてあるつて云うもんですから、何だか怖くなり

まして……ほかの方に読んで頂くのは劍呑^{けんのおん}だつて母親^{おつかさん}が云うも
んですから、大急ぎで貴方に読んで頂きに……」

俺は思わず一丈^{じょう}ばかりの溜息を吐^ついたよ。滑稽な気持ちなんか
ミジンも感じなかつたから不思議だよ。これ程の恐ろしい作^{はたらき}用
を現わした愛子の、何も知らないでオドオドしている近眼を暫く
の間茫然と見詰めていたね。

「ふうむ。あんたはこの手紙で見ると、金兵衛さんが死ぬ^{ひと}る一個
月^{つき}ぐらい前に、どこかの待合で、若いお客と差しでシンミリした
事があるんだね」

愛子の顔色が見る見る真青になった。この前に訊問した事をド
ウやら思い出したらしいんだ。それから又、忽ち耳の付け根まで

赤くなつたが俺の顔を見ながらオズオズと点頭うなずいたものだ。

「ね。あるだろう。思い出したろう」

愛子はいよいよ真赤になつて俯向うつむいてしまった。俺は胸をドキドキさせながら彼女に対して訊問の秘術を尽し初めたが、彼女は手もなく釣り込まれてポツポツ話し出した。

「ハイ。やつと思ひ出しました。それは二十七八の若旦那風の人でした。待合ではオオさんと云つておりましたが、お名前は大深さんと云いましたか……お召物からお金遣いまでサツパリした方で、いいえ。手は両方とも職工らしくない、白い綺麗な手でした。お酒が少しばかりまわりますと、親切に色々あたしと妾の身みのうえ上をお尋ねになりましたので、何もかも真個ほんとの事をスツカリ話しました。

金兵衛さんの事までもスツカリ……毎月二十五日が本郷の無尽講むじんの寄合なので、帳面とお金を持って行かれる。その帰りに電車で妾あかしの所へ見える事まで話しました。その若い方は何でも、信州の或るお金持の御養子さんで、東京へ来て高等工業学校へ這入ったが、養家が破産したために学校へ行けなくなった。それから色々苦労をして稼ぎながら、築地の簿記の夜学校へ這入っているうちに、半年振りに養家の残りの財産が自分のものになったから、煙草を買うたんびに思っていた君を名指しにして遊びに来た。これから時々来るから……といったようなお話で、お宅は芝の金杉という事でしたが……それはそれは御親切な……」

「……ふうん。それから、シツポリといい仲になったって訳だね」

愛子は又耳元まで赤くなった。涙を一しずくポロリと膝の上に落した。

「うんうん。わかっているよ。だからあの時も、そのお客の事を俺に話さなかつたんだね」

愛子は丸鬚を、すこしばかり左右に振った。シクリシクリと戯しやくり上げ初めた。

「そうかそうか。そのお客だけがタツタ一人好いたらしい人だった事を、あの時は思い出さなかつたんだね」

愛子は微かに震えながら頭を下げた。多分謝罪あやまっているつもりだったのだろう。俺は一膝乗り出した。

「そこでねえ。話は違ちがうが、昨日きのうアンタはどこか、電車か何かの

中で三人切りになった事があるかね。ほかの二人は男だった筈だが……」

愛子はビツクリしたように顔を上げた。

「どうして御存じ……」

「アハハ。この手紙に書いてあるじゃないか。どこだい、それは……」

「昨日、きのう伯父さんの法事をしに深川へまいりました」

「アツ。月島の渡船わたしに乗ったんだね。成る程成る程。その時にアタと一緒に乗っていた二人の男の風体ふうていを記憶おぼえているかね」

愛子は恐ろしそうに身体からだを竦すくめた。俺が社会主義者の事でも調べていると思ったんだろう。例の黒眼勝くろめがちの眼をパチパチさせな

がら唇を震わした。

「妾は眼が悪う御座いますので、三尺も離れた方の風体はごようすブーツとしか解りませんが……」

「わからなくともいいからアラカタの風采でいいんだ。二人とも紳士風だったかね」

「いいえ。一人は青い服を着た職工さんで、もう一人は黒い着物を着た番頭さんのような方でした」

「その職工みたいな男の人相は……」

彼女はいよいよ恐ろしそうに椅子の中に縮み込んだ。

「あの……鳥打帽を……茶色の鳥打帽を眉深くまぶか冠っておられましたので、よくわかりませんでした。モウ一人の方はエヘンエヘ

ンと二つずつ咳払いをして、何度も何度も唾をお吐きになりました」

「アハハ。そうかそうか、それは色の黒い、茶の中折なかおれを冠った、背の高い男だったろう。金縁きんぶちの眼鏡をかけた……」

愛子はビツクリして顔を上げた。

「……どうして……御存じ……」

俺は直ぐに呼よびりん鈴を押して給仕を呼んだ。

「オイ。給仕、控室いしむろの石室君いしむろにチョット来てもらってくれ」

「かしこまりました」

石室刑事は直ぐに来た。

「何だ何だ……ウンこの婦人かい。昨日きのう月島の渡船場わたしで一緒に乗

ったよ。どうかしたんかい……ナニ。一緒に乗った職工かい、ウン知ってるよ。深川の紫塚むらつか造船所の製図引でおおふかたいぞう大深泰三という男だよ。社会主義者の嫌疑で一度調べた事がある。高等工業にいたとかいうがチョットお坊ちゃん風のいい男だよ。昨日は俺きのうの顔を見忘れていたんだろう。知らん顔をしていたつけが」

正直のところ、この時ぐらい狼狽した事はなかったね。社会主義者なんていうのは、見掛によらない敏感なもので、逃足の非常に早いものだという事がこの時分からわかっていたからね。

「ウン直ぐに行こう。重大犯人だ。君も一緒に来てくれ。詳しい事はアトから話す。アツ……いけない。愛子さん愛子さん」

愛子はウンと気絶したまま椅子から床の上へ転がり落ちてしま

った。残忍な話だが、俺はその時に思わず微笑したよ。この気絶は彼女の話の真实性を全部裏書きしたようなものだったからね。

警察医が来て愛子を介抱している間に、俺達は紫塚造船所に乗込んで、机の曳ひきだし出を片付けている最中の大深を、有無を云わさず引つ捕えた。大深はその頃芽生えかけていた社会主義者のチャキチャキで幸徳秋水の崇拜者だった。目的のためには手段を択まずという訳で、露西亜ロシアへ行く旅費を得るために、製図屋仲間の評判から愛子の旦那の金兵衛に眼を付けて、愛子の口から様子を探ると、仕事用のニツケルめつき鍍金の四角い鉄棒を持って熱心に跟つけまわしている中うちに、屏風びょうぶを建てまわしたような材木置場で、絶好の機会に恵まれたので断然、絶対安全な兇行を遂げたんだね。

しかし大深はタツタ一度の馴染なじみなもんだから愛子の近眼に気付いていなかったし、愛子の方も、そんな事までは打明けなかっただね。だから愛子の例の通りの潤んだ、惚れ惚れとした眼付きでジイツと見られた時に、スツカリ感違あやまいをしてしまったんだね。元来が主義にカブレた青二才で、ホントの悪党じゃなかったもんだから、ほんの一時の自惚うぬぼれから身を滅ぼしてしまった訳だ。手錠をかけたアトで例の手紙を見せると大深は、青い顔になつてうなずいた。

「馬鹿だなあ……この手紙を他人ひとに見せるなんて……もつとも俺の方がよっぽど馬鹿だったんだが……アハハハ……」

と空虚うつろな高笑いをしたつけ。実にサツパリしたい度胸だった

が、聞いてる吾々は笑おうにも笑えない気持がしたよ。

むろん癩しやくに障やみつていたから大深の就縛は新聞社には知らせなかった。そのまま暗やみから暗やみへと死刑になつてしまつたが、可哀そうなのは愛子で、それから後のちチヨイチヨイ大深へ差入れなんかをしていたらしい。そうして彼が死刑になつた事が新聞に出た晩に、自宅の台所で首を縊くくつて死んでしまつた。

遺書も何もなかつたので原因はわからないが、自分の口一つから金兵衛を殺し、又大深を殺した事がわかつたので、すっかり悲観して思い詰めてしまつたんじゃないかと思う。

何……君にはわかつている……？

愛子は最初、大深に初恋を感じていたのを自分でも気付かずに

いたんだ。それがあの手紙を見て焦げ付くほど燃え上った。そうして大深の死刑と一緒にこの世が暗闇くらやみになった。

ふうん。恐ろしい間まだるっこい惚れ方をしたもんじやないか。惚れていた事がわかるまでに人間を二人も殺してさあ。

ふうん。ほんとうに純真な、内気な女なんてソナもんだ、そこがこの話のスゴイところだ……小説になるところだっていうのかね。

アハハ。成る程ねえ……。

青空文庫情報

底本：「夢野久作全集10」ちくま文庫、筑摩書房

1992（平成4）年10月22日第1刷発行

入力：柴田卓治

校正：ちはる

2000年12月18日公開

2006年2月23日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランテイアの皆さんです。

近眼芸妓と迷宮事件

夢野久作

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>